

国際研究フォーラム

「日常生活と宗教文化：戒律をめぐる問題を中心に」

2014年2月13日（木）、日本文化研究所主催、科学研究費基盤（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者：井上順孝）の共催により、国際研究フォーラム「日常生活と宗教文化：戒律をめぐる問題を中心に」を開催した。

本フォーラムの趣旨は、様々な民族的・文化的背景を持つ人々が日本社会で生活するという局面に焦点を合わせ、そこでどのような状況が生じているのかを検討し、その際にそこに宗教文化がどのように関わっているのか、とりわけ戒律をめぐる問題について議論するというものであった。これは研究所がこれまで推進してきた宗教文化教育を背景とするものであり、かつ日本社会における現在進行形の問題として検討していかなければならないという問題意識において本フォーラムは企画された。

登壇者について、まず英国ウォリック大学のジュリア・イプグレイヴ氏（Julia Ipgrave, Senior Researcher, Warwick Religions and Education Research Unit, Centre for Education Studies, University of Warwick, England）に多民族・多宗教状況下にある英国における宗教教育について「イギリスにおける多民族・多宗教の問題とその解決をめぐる——教育の現場を事例に」という題目の基調講演をお願いした（※その日本語訳を本号に講演録として掲載）。

続いて、実際に日本で生活する上で、様々な宗教文化の実践との関わりでどのような問題や注意点があるのかについて、三名の方よりそれぞれの経験や思うところについてお話を伺った。

まずインドからの留学生でありジャイナ教の実践者であるアンキタ・ジャイン氏より「インド宗教をめぐる」という題目で発題があり、次にイスラエル出身の野田ドリット氏より「ユダヤ教をめぐる」という題目で発題があった。最後にジャパン・イスラミック・トラストのクレイシ・ハールーン氏より「イスラームをめぐる」という題目で発題があり、その後小田淑子氏（関西大学）のコメントを受けて参加者全員による総合討議を行った。なお、冒頭の趣旨説明と全体の司会を井上順孝が務めた。以下、発題と議論の概要を記す。

ジュリア・イプグレイヴ氏の基調講演は英国社会において宗教的・文化的な多様性がどのように取り扱われてきているのか、またそれが教育の現場にどのような影響を与え、あるいは具体的に実践されているのかについて、1980年代頃から現在に至るまでを中心に歴史的な変遷に目を配りながら論じるものであり、議論の中でイプグレイヴ氏は英国における信仰学校について触れた。信仰学校のあり方は多様であるが、いずれもある信仰共同体と結びついて運営され、その信仰共同体の持つエトスを重視する点においては共通しているという。そして、ある信仰共同体がその子弟の信仰を育んだり、あるいはその価値観を継承したりしていく際に、こうした信仰学校が大きな役割を果たしていることが指摘された。

続いて、アンキタ氏からインドの宗教文化について発題がなされた。アンキタ氏はインド出自の諸宗教と、外からもたらされて根付

いた諸宗教についてスライドを交えながらそれぞれの概要などを示し、インドの地で多様な宗教伝統を奉じる人々が共生していることについて述べた。そして、もともとインドにおいて自分と異なる宗教伝統を奉じる人々と日常的に交流しているため、例えば日本のように異なる宗教文化を持つ社会においても、その違いを尊重して適応することができると論じた。

次に、野田氏よりユダヤ教の宗教文化について発題がなされた。野田氏は、苦労話を織り込みながら自身のこれまでの日本での生活を振り返り、現状に深刻な問題があるわけではないが、あえて問題点を挙げるならば日本ではユダヤ教やイスラエルについてそもそも知識が乏しく、正しく理解されていないように思うとした。これと関連して、世代間の継承において次世代の者がユダヤの宗教文化を誇りに思うことができないような感覚を持ってしまう可能性があることを指摘した。また日常的な信仰実践について、コーシャー（食事規定）などユダヤ教の戒律を簡単に紹介した上で、日本社会で生活する上でこれらを厳密に守ろうとするならば難しい点があることについて触れ、自身は折り合いを付けながら次世代にユダヤの宗教文化を伝えていこうとしていると述べた。

最後に、クレイシ氏からイスラームの宗教文化について発題がなされた。まずイスラームは生活の全ての領域に関わるものであり、狭義の宗教としてのみ捉えるべきではないとした上で、日本社会においてムスリムであることの問題については、外国から来た人がムスリムとして生活するよりも、日本人がムスリムとして生きようとする場合に社会的な障壁が多いと指摘した。そして全く問題がないわけではないにせよ、全体としてはイスラームについての理解が進みつつあるとし、戒律に関しても、例えば食べ物などについてはそれ程大きな問題となっていないとした。その

上で、あえて指摘するならば子弟教育の問題があるとし、イスラームの価値観を伝える学校があってほしいと述べた。

休憩を挟んで討議に移り、まず小田氏よりコメントがあった。小田氏は英国と日本の状況を比較した上で、信教の自由、そして異なる宗教文化を尊重するという姿勢を日本社会においてどのように育んでいくことができるのかという問題提起を行った。関連して司会より、日本には他宗教に寛容な土壌があるという見方もあるが、まだ本格的な多宗教状況を経験していないという側面についても考えなければならないのではないのかという補足がなされた。

その後の議論では、例えば食事に関する戒律を日本で守ろうとする場合の問題点が取り上げられ、実践において柔軟さが必要であるという見解が示された。これと関連して、もし戒律を守れなかった場合にどうなるのかということについても議論があったが、必ずしも罰則があるから守るというような感覚で行われているわけではないことも述べられた。

また日本の宗教文化との関係では儀礼、例えば冠婚葬祭などへの関わり方が論じられた。登壇者からは、厳格な解釈が存在することとは別に実践における柔軟な対応が述べられたが、しかし例えば仏式の葬式に参列はするが焼香はしないなど、守るべき点があることも述べられた。

全体を通して、戒律にまつわる問題と関連して、子弟教育の問題が浮かび上がってきたように思われる。いずれにしても、このフォーラム自体が得がたい機会であり、議論を通して、今後はホスト社会の側が多様な宗教文化的背景を持つ者たちの多様な参与のあり方を承認する方向へと向かっていくことが必要となるのではないのかという基本的な方向性が確認された。

(星野靖二)